

1 獵犬ベス・ギーラットの墓

角笛の音が槍持ちたちに届いた
今朝は快晴だった
たくさんの獵犬たちが
ルーウェリンの角笛に集まった

ルーウェリンはなおも大きく吹き鳴らし 5
一段と大声張り上げた
「どうした ギーラット まさかお前に
ルーウェリン様の角笛が届かぬとでも

「忠犬ギーラットはどこにいる 10
わしに仕える最高の犬
従順で勇敢で 家では子羊のごとくおとなしく
獲物を追う様は 獅子のごとく勇猛な犬よ」

忠犬ギーラットが食事をとるのは
ルーウェリン様の食卓でだけ
主人を見守り 仕え 慰め 15
夜は主人のベッドを寝ずの番

事実 ギーラットは比類なき名犬で
ジョン王からの贈り物
だが今は ギーラットが姿を現さないので
やむなく 彼抜きの狩りが始まった 20

猛々しい追っ手の声が
岩場や谷底を流れ
人声と獵犬いぬの声が無数に入り交じって
スノードンのごつごつした岩山にこだま 飮する

その日ルーウェリンは 25
シカ狩りもウサギ狩りも楽しめなかった
ギーラット抜きでは
獲物もまるで獲れなかった

不機嫌なルーウェリンは家路を急いだ
屋敷門の近くまで戻ってくると
務めを怠ったギーラットが
ご主人様を出迎えに跳んでくるのが見えた 30

しかし 屋敷まで辿り着いたとき
ルーウェリンは仰天して 立ち尽くした
ギーラットの躰中が血まみれで
唇からも^{きば}牙からも血が滴り落ちていた 35

今まで見たことも無い愛犬の顔つきに
ルーウェリンの驚愕の^{まなこ}眼は張りついた
愛犬は 嬉しさをかみ殺すように
うずくまって ご主人様の足を舐めた 40

ルーウェリンは急ぎ足に進んで行った
ギーラットも^{あと}後に続いた
目に映るいたるところ
生々しい血の固まりが張りついていた

赤子のベッドがひっくり返され
血のついたベッドカバーが引き裂かれていた
部屋中の壁も床も
血だらけだった 45

ルーウェリンは赤子の名を呼んだ 返事が無い
恐怖に打たれて探しまわった
至る所 血また血
赤子の姿はどこにも無い 50

「畜生め 我が子を喰い殺したのは貴様だな」
逆上した父親は こう叫ぶと
復讐とばかりに ^{つるぎ} 剣の柄まで深々と
ギーラットの脇腹に突き刺した 55

うつ伏せに倒れたギーラットの哀願の表情にも
ルーウェリンは冷たく応えなかった
しかし ギーラットの^{いまわ}今際の鳴き声が

ルーウェリンの胸に重く響いた 60

ギーラットの今際の^{いまわ}鳴き声に
近くで眠っていたものが目を覚ました
赤子の泣き声を聞いた時の
ルーウェリンの喜びを何と表現できようか

丸めた毛布の下に隠れて 65
慌てふためいた父親の目に触れなかったのだ
眠りから目覚めた赤子は
バラ色の愛くるしい頬に父親の口づけを受けた

赤子にはどこにも怪我は無く 脅えた様子も無い
長椅子の下に横たわっていたのは 70
肉を喰いちぎられ 息絶えた異形
死してなお 凄まじき形相の狼だった

ああ ルーウェリンの苦痛やいかに
今や 真相は明らかだった 75
主人の世継ぎを救うために
勇敢な愛犬が狼を殺したのだ

どんなに悲しんでも 取り返しはつかない
「さらばじゃ 最高の忠犬よ
お前の息の根を止めた狂気の一撃を
わが胸は生涯悔いるであろう」 80

立派な彫刻を施した
見事な墓が建てられた
忠犬をたたえる言葉をちりばめた大理石が
哀れなギーラットの亡骸を守り続ける

槍持ちも森番も 何人たりとも^{なんびと} 85
心震わすことなくして その場を通れない
涙で濡れそぼつ辺りの草が乾くことは無い
それは ルーウェリンの悲しみの証であった

そばを過ぎ行く者は夕闇に包まれて立ち尽くし
角笛を あるいは 槍を墓石に立て掛けて 90

哀れなギーラットの^{いまわ}今際の鳴き声に
耳を打たれるのであった

偉大なるスノードンの岩山が老い果てて
風雪に屈する時が来るまで
「ギーラットの墓」なる文字を刻んだ
聖なる墓が風化することはない

95

(山中光義訳)